

機関番号：13301
 研究種目：基盤研究 (C)
 研究期間：2008～2010
 課題番号：20520068
 研究課題名 (和文) ハンガリーの思想家ルカーチと日本人たちの往復書簡の諸相
 研究課題名 (英文) Some Aspects of Correspondence
 between the Hungarian Thinker Lukács and
 Japanese
 研究代表者
 丸山 圭一 (MARUYAMA KEIICHI)
 金沢大学・名誉教授
 研究者番号：50019262

研究成果の概要 (和文)：ブダペシュトのルカーチ・アルヒーフにルカーチと日本人との 180 通の往復書簡(すべて戦後)が眠っていた。この新資料の解読により、具体的な問題に即して思想家ルカーチの考えや態度を知る材料が豊かになったと同時に、日本の問題として書簡の大方の内容をなす翻訳問題を中心に、ルカーチ受容史、ひいては思想文化史に新たな道が開かれることになった。ドイツ語と英語から成る書簡を要約し、調査事項を註釈として付した冊子を作成した。今後の研究の特異な基礎資料の一つである。

研究成果の概要 (英文)：About 180 letters between Lukács and Japanese are in the Lukács-Archiv in Budapest, but this correspondence was unknown before. My study of this letters has made the image of Lukács as man and thinker richer. As many of the letters concern themselves in translation of Lukács' works, a new channel to the history of his reception in Japan has been opened through their study. I have made out a booklet with the purports of the letters and the annotations to them to help future study.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：ルカーチ、ハンガリー、日本近代、翻訳、書簡、受容史、思想、文学論

1. 研究開始当初の背景

ルカーチは長年来の私の主要な研究対象だが、前回の科研費での仕事の過程でルカーチ・アルヒーフでの調査中に、たまたまこれまで知られていなかった日本人たちとの往復書簡の存在を知った。1万数千通におよぶルカーチ書簡全体のなかに占める比重はご

く小さいが、それ自体として決して少ないとは言えない。こういう私たちに身近な形式で思想家の内面や態度に接することができるチャンスはめったにあることではない。知られざる資料の紹介ということだけでも重要だが、1920年代以来、日本に多くの読者を持ち、大きな影響を与えて来たこの思想家の研究に、往復書簡の精査・解明は独特の光を当

ることができるだけでなく、思いがけぬ切り口から日本の思想文化史の断面とさまざまな関連とを開示することになるだろう、という期待がこの研究の出発点であった。

2. 研究の目的

(1) 何よりもまず思想家ルカーチと日本人たちとの間に少なからぬ書簡のやり取りがあったという事実を知らせること、そしてどんなふうに活用されるかにかかわらず、その書簡を何らかの形で提供することそのものが、一つの重要な目的でもある。

(2) ルカーチの研究者や彼の著作と親しみ影響を受けた者にとっては、書簡という独特の、かつ私たちに身近な形式を光源にして、ルカーチの人と思想のいっそう深い理解に迫ることができる。往復書簡という媒体は、直接に応答の形で自身の考えや態度を生き生きと示す、またとない形式である。

(3) 書簡の大方は翻訳と翻訳権を中心としたやり取りで、こうしたきわめて具体的な素材に基づいて、日本におけるルカーチの翻訳と受容のあり方について、また広くヨーロッパ思想の受容のあり方について再考し検証する機会を持つことができる。

(4) ちょうどルカーチ・アルヒーフではルカーチの膨大な書簡を整理しデジタル化するプロジェクトが進められており、日本部分のごく一部にすぎないとはいえ、その解明をそれに連動させることで、日本部分の情報提供などにより、ささやかながら国際的な協力を行なう。

3. 研究の方法

(1) テキストの入手。何よりも往復書簡全体のコピーを入手することが出発点となるが、科研費申請に先立って、ルカーチ・アルヒーフとこの点での確約があり、それをまず実行する。そこから先の仕事には二つの面がある。一つは言わば書齋仕事で、いま一つは外での調査だが、これらは互いに絡まりあうので、できるところから手をつけ、時々再整理しながら、最後にまとめる。

(2) 書齋での仕事。

① 書簡はドイツ語と英語なので、翻訳しな

がら趣旨を正確に読み取る。

② 各々の書簡を読み比べ、前後関係、相互の応答関係を掴んで、順序立てて整理する。書簡全体の一覧表を作成する必要がある。

③ 書簡テキストの分析。重要な視点としては、ルカーチの人と思想を新しく照らすような事柄、相手の日本人の人物と仕事また書簡の主旨に深く関わる事柄、ハンガリーその他の国でなお関連や背景を解明すべき事柄、翻訳や受容の理論的・現実的問題に関わる事柄、日本の翻訳史や思想文化史に繋がっていく可能性を含んだ問題等々が考えられる。

④ 書簡の背景としてルカーチのその時々状況や何を課題として仕事をしてきた時期かということについてこれまでの研究を生かし、それとの密接な関係において書簡の内容を考察する。

⑤ 調べたことはさしあたり分かったことから註釈として残し、蓄積していく。

⑥ 日本のルカーチ翻訳史、受容史の資料を集め、また直接の基礎資料の一つとしてルカーチ邦訳リストを作成する。

⑦ 上記のことと並行して、パソコン内に調査事項を次々に組み込んでいく受け皿となるモデルを工夫し作成する。後にこれを基にして冊子を作る。

⑧ 前回科研費の仕事であるルカーチ・ビブリオグラフィは、ルカーチとの取り組み全体の基礎をなすので、適宜補足・改訂を加える。

(3) 外での仕事。

① 金沢大学図書館での調査と資料収集。国内外の図書館への書籍借用、コピー取寄せの依頼。

② 書簡の背景および内容と関わる事柄についてハンガリーとドイツ圏での実地調査。ハンガリー科学アカデミーが総力を挙げて完成させ、数年前に刊行された大百科事典の購入。

③ ルカーチ・アルヒーフでの調査、またとりわけ書簡プロジェクトについて所長からの聞き取りを実施する。

④ 書簡に関わる日本人またはその関係者との面談等。

4. 研究成果

(1) ルカーチ国際ビブリオグラフィの完成。これは前回の科研費ですでに「暫定版」を作成していたが、ドイツで出版することになり、今後のすべてのルカーチ研究の基礎となることもあり、大幅に補足・訂正し、完成に努めた。(原稿はすでにドイツに送られている。)

(2) ルカーチ邦訳リストの作成。

これは書簡と直接に関わる背景をなし、日本におけるルカーチ受容史の基礎データなので、「ルカーチ研究通信」の別冊として刊行した。

(3) 往復書簡註釈版の作成。

書簡はそのまま公表するには、何十人もの異なる文体の翻訳上の困難ということはさておくとしても、プライバシーなどのなお慎重に考慮すべき問題もあるため、要旨を記すにとどめ、内容や背景、書簡の相互関係などについての註釈を付して、小冊子を作成した。ルカーチ研究はもとより、とくに日本におけるその受容史の重要な一部をなす。

(4) 「ルカーチ研究通信」の刊行。

ルカーチ研究、文献紹介、最近のニュースなどを内容とした小冊子で、不定期に刊行。第3号まで出した。読み手からの応答や激励があり、こうした双方向性と研究の持続には適切な形態であることを確信した。国会図書館と金沢大学図書館に収める。

(5) 位置づけとインパクト。

① 以上のうち(1)から(3)は、いずれもルカーチ研究にとっての基礎的な資料に当る。ここ2、30年の世界史的な変動のなかでルカーチ思想の全体像を根本的に再検討する必要があり、他方で研究者の世代交代によって新しい視角からルカーチと取り組む人たちが登場している。これらの仕事はその人たちに安定した出発点を提供することになると思われる。仕事のこうした性質上、かなり立ち入ってルカーチと取り組む人を除いて、さしあたり何らかの直接的なインパクトを与えることは想定できないが、ルカーチ研究の長期にわたる持続的な支えになりうるものである。

② ただし(1)の国際ビブリオグラフィについては、外国で大きな反応があった。最初にその暫定版を見たルカーチ・アルヒーフからオンライン版の作成を依頼されたため、さしあたり気づいた誤植などを訂正した版を提供した。現在、これはアルヒーフのホームページから誰でも自由に見ることができる。さらにそのオンライン版を見たルカーチ国際学会の理事から印刷版も必要だろうという提案があり、あわせてその仲介でドイツの出版社から刊行の申し入れがあった。それを受け入れることにし、かなりの新資料を補足し、記載事項の誤りを徹底的に直し、使いやすい

工夫をこらしてドイツ人向けの新しい版の原稿を作成した。これは年内に刊行される予定である。

③ 「ルカーチ研究通信」の刊行は、科研費での仕事の過程で思いついたものだが、日本での翻訳や受容と関わるテーマを含んでいるので、書き誤りの指摘や知らないでいた事実関係についての教示など、電話やメールなどでの反応が返ってきて、大いに助けられるとともに励まされた。ほぼ100部印刷。

(6) 今後の見通し。

① (1)の「ルカーチ国際ビブリオグラフィ」は、あくまでドイツ人とドイツ語を用いる研究者向けに作成されており、日本向けのものが別に必要である。これまでの研究を生かし、ルカーチの生涯とビブリオグラフィを合わせた、今後の研究のための便覧としても役立つようなものの作成と取り組みたい。

② (4)の「ルカーチ研究通信」はしばらく中断しているが、自分の状態相応に刊行できる恰好の発表媒体なので、今後とも息長く続けようと考えている。

③ 「ルカーチと日本人たちの往復書簡」の註釈版冊子を作成したが、これ自体はあくまで日本におけるルカーチ受容史、またこれをバネとした日本近代の思想文化史の資料として生かされるべきもので、註釈のための調査・研究の過程で、その広さ、深さ、複雑さの問題にぶつかった。期間中にまとめあげるところまで行かなかったこれらの問題と継続して取り組みたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計13件)

① 丸山珪一、甦るルカーチ、季報唯物論研究、査読無、第113号、p.1-4、2010年

② 丸山珪一、ルカーチの博士論文「若きヘーゲル」と審査[新稿]、アリーナ、査読無、第7巻、p.531-540、2009年

③ 丸山珪一、ルカーチをめぐる名前談義、ルカーチ研究通信、査読無、第3号、p.1-3、2009年

④ 丸山珪一、「マルクス主義研究週間」とは何か、ルカーチ研究通信、査読無、第3号、p.4-17、2009年

⑤ 丸山珪一、ルカーチの「最初の合法的」翻訳の顛末—最初の発行人・笹本駿二と『ゲーテとその時代』、ルカーチ研究通信、査読無、第2号、p.3-8、2009年

⑥ 丸山珪一、ルカーチのプレヒト追悼演説(忘れられた演説の含意と背景)、ルカー

チ研究通信、査読無、第2号、p.9-12、2009年

⑦ 丸山珪一、ルカーチ邦訳リスト、ルカーチ研究通信、査読無、第2号別冊、20p. 2009年

⑧ 丸山珪一、書評・伊藤成彦著『ローザ・ルクセンブルク思想案内』、季報唯物論研究、査読無、第108号、p.118-121、2009年

[図書] (計1件)

① 丸山珪一、自己出版、ルカーチと日本人たちの往復書簡(要旨と註釈) — 日本におけるルカーチ受容史の基礎資料として —、2011年、62p.

[その他]

ホームページ等

Maruyama Keiichi: Bibliográfia,
<http://web.phil-inst.hu/lua/archivum>
→ Lukács György → Bibliográfia

6. 研究組織

(1) 研究代表者

丸山 珪一 (MARUYAMA KEIICHI)

金沢大学・名誉教授

研究者番号：50019262